

Field boots



DAICHI

Field boots

フィールドブーツ

#1000

フィールドブーツ#1000

SS (23.0cm) - LL (27.0cm)
メリヤス裏



つま先から足首にかけてゴム生地を何枚も重ね貼りし、足首部分をスリムに設計。足首に安定感がありアウトドアでの長時間の歩行に最適です。靴底は、専用の特別な配合のゴムを使用し、滑りやすい斜面でもグリップが効いて安心です。野暮ったく見えない細身のシルエットは、私服に合わせてタウンユースにも。

第一ゴムの新しい定番ライン

第一ゴムの定番長靴「フィールドブーツ #1000」の仲間として「フィールドブーツ #1308」という冬履が誕生しました。プロ仕様でありながら、街でも履けるデザインです。

リップル底

深い溝と、粘り気が出るように配合されたゴムにより斜面でも滑りにくいソールを採用。
※SS、Sサイズは別のソールです



開閉可能なサイドベルトで脱ぎ履きも簡単に

サイドベルトを広げると履き口が広がり、パンツの裾も無理なく長靴の中に入れることができます。



第一ゴム史上最大枚数のゴム生地貼り合わせ

長靴は経年劣化によりゴムが硬くなり割れやすいのが欠点。フィールドブーツ#1000は7枚の柔らかなゴム生地と付属11パーツを張り合わせているから丈夫。第一ゴム史上、使っているゴム生地が一番多いんです。



New!

#1308

フィールドブーツ#1308

M (25.0cm) - XL (28.0cm)
5mmウレタン+ボア+10mmフェルト

カバーの後ろ側を狭くし、歩いて跳ね上げた雪が入りにくい設計。

今年新たにラインナップに追加された「フィールドブーツ #1308」は、2シーズンに渡り雪山での使用テストを何度も繰り返し完成しました。深い雪の中を進むときも、履き口部のベルトが雪の侵入を防ぎます。長時間の屋外活動でも爪先を暖める、自慢の10mm厚フェルトの着脱可能なフェルトインナー。雪山の急勾配でも踏ん張れる柔らかい靴底は、そのまま車に乗って運転も可能。

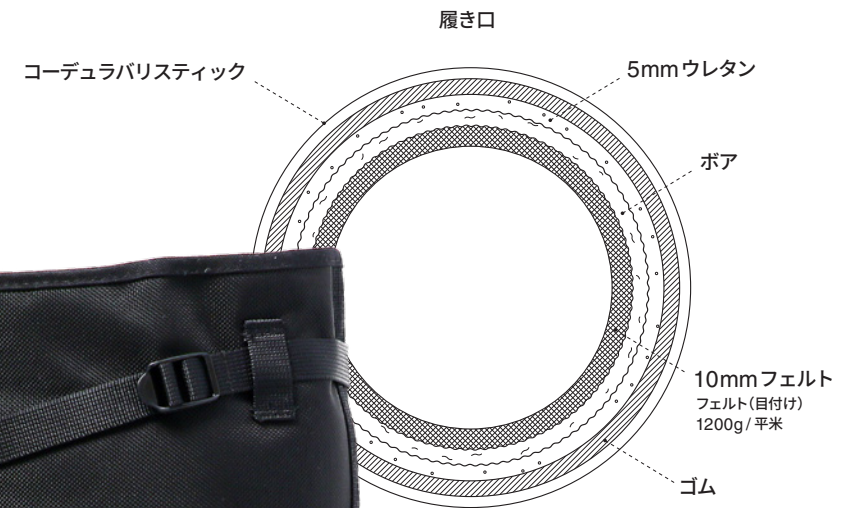
* サイズ選び
無理のない範囲でピッタリなサイズを選んで下さい。着用により少しずつ、ウレタンとボアが沈み込み、フェルトがあなたの足型に成型されます。

厳しい寒さに耐える自慢のフェルトインナー

着脱可能なフェルトインナーに使用されている生地には、「WARMAL」が織り込まれています。繊維に練りこまれた特殊セラミックスが遠赤外線を放出。足先まで暖かく包み込み、蓄熱保温性にも優れています。



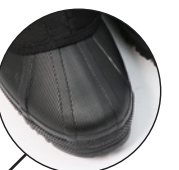
帝人フロンティア株式会社
WARMAL.
ウォーマレ。



CORDURA Ballistic®

「CORDURA」の中でも特に耐久性の高いファブリック「CORDURA Ballistic」を使用。

細いゴムを4本縦貼り。滑る雪山でもグッと爪先で踏ん張れる。



深い雪でも大丈夫 雪の侵入を防ぎます

履き口部にぐるっと一周巻かれたベルトを絞ると、長靴とふくらはぎがピタッとフィットするように設計されています。深い雪の中を進む作業や、雪かきの時も、雪の侵入を防ぎます。



Field boots #1308

雪山の厳しい環境でも 耐えられる長靴の開発

雪山での厳しい環境で働くスキーパトロール・山本雅也さんに、約2年に渡り試作品を履いてもらい、耐久性・防寒性のテストを行った、新製品「フィールドブーツ #1308」。長靴開発の窓口となった第一ゴム・営業の吉田篤史と山本さんの2人に、「フィールドブーツ #1308」が完成に至るまでの製作秘話を伺いました。

スキーパトロール
山本雅也さん

第一ゴム 営業
吉田篤史

信頼できる道具を使うと、 やるべきことに集中できる

—— フィールドブーツ #1308の第一印象は？

山本 第一印象は、履いたことのないブーツ。ブーツ？いや、長靴ですよ。今までにないフィット感・軽さでした。驚きました。長靴のイメージからは遠く離れていました。でも、スノーブーツでもない。フィールドブーツ #1308は軽くてフィット感があるということにとにかく驚きました。

—— 冬場、どんな靴を求めているのでしょうか？

山本 まずは暖かいこと。そして滑りにくいこと。今までにいろいろな長靴を使ってきましたが、滑りにくいけど寒いとか、グリップ力が弱いとか。そして履いているうちにゴムが割れてくるので、履けなくなるのが早いです。消耗品という感じです。ところがフィールドブーツ #1308は割れないし、ねばりがあって滑らない。そしてフェルトインナーが入っているからとにかく暖かい。求める条件が揃っていると思っています。道具として非常に使いやすく、快適に履けます。

—— なるほど長靴は道具なんですね。

山本 はい、道具であり身に付けるも

の。信頼できて安心して使えるからこそ、やるべきことに集中できるんです。余計なことを考えずにできるっていいですよ。

—— それは長靴に限った話ではなく？

山本 はい、全てにおいて自分が信頼できる、使いやすい道具を選びます。何をしても集中できるというのは重要です。今までの長靴は、足が冷たいし、濡れるし、雪が入る……と集中できない要素がいくつもありました。それが、暖かくて、滑らなくて、濡れないので気にしないで出来ます。そしてゴムが柔らかいから、違和感なく車にも乗れるんです（笑）。フェルトインナーが入っているブーツは、たいてい厚くて、感覚が分かりづらんです。車のアクセルを踏むとなんだか違和感があるんですよ。でもフィールドブーツ #1308は、違和感がないです。雪山から日常まで、幅広く対応できると思います。

長靴の底が 地面から離れずに、 しっかりグリップしてくれる

—— 第一ゴムのゴムが割れにくい、滑りにくいというのは本当ですか？

山本 本当にそう思います。固くない、割れない、滑らない。ゴムの柔らかさ

の質が違うんじゃないでしょうか。例えば、雪道で夏タイヤは硬くてグリップしないですよ。でも、スタッドレスタイヤはゴムが柔らかくしっかりグリップしますよね。長靴も同じ。第一ゴムのゴムは非常に柔らかくて、吸い付くというか、ねばるというか。グリップ力があると思います。

—— 長靴がねばる……というのは？

山本 「ねばる」というのは、靴底が地面から離れずに、しっかりグリップしてくれる感じ。ゴムが固い長靴はグリップが効くのは「点」です。踏んでいる箇所だけに力が入る。一方、フィールドブーツ #1308の場合は、踏んだものを「面」として全体的に噛むので、しっかり次の一歩を踏み出せるんです。このねばりが、第一ゴムさんの長靴の特徴かもしれません。

—— 耐久性についてはいかがですか？

山本 今まで履いていた長靴は短い期間でひび割れ、破れ履けなくなっていました。フィールドブーツ #1308の試作品をテストとして丸2シーズン履いていますが、破れることなく使い続けています。柔らかいからシワがでさず、ヒビ割れも見当たりません。

—— 吉田さん、第一ゴムとしては「当然です」という感じですか？

吉田 いいえ、そんなことはありません。



ん。これほど寒くて過酷な条件でテストするのは初めてだったので内心ドキドキしていました。丸2シーズン履いても割れないのは嬉しいですね。北海道の冬の雪山で、2シーズンしっかり履けたというのは、説得力になると思います。

—— 何か足りないところはありますか？

山本 特にないです。開発の過程で、吉田さんとは話して、話して、話し尽くしました。実はフィット感は最初にできたモデルが1番良かったんです。次の試作品は、フィット感が失われていた。それを吉田さんにお伝えしたら、すぐに改善されたモデルを持ってきてくれました。フィット感を高めるためにカバーの構造を立体的に変更していただいたり、改善を繰り返しました。

みんなの想いの結晶です

—— 山本さんにテスターをお願いし

た経緯を教えてください。

吉田 初めてお会いしたのは4年前。夏のスキー場イベントで開催されたフリーマーケットでした。第一ゴムも出店していて、その時フィールドブーツを購入してくださったんです。仕事でも長靴を履くと仰っていたので、斜面でグリップが効くフィールドブーツ #1000をおすすめしました。その時に「もし冬季のテストが必要ならお手伝いしますよ」って言ってくれたんです。

—— それが4年後にこういう形に。

吉田 当時はこうなるとは想像もつきませんでした。でも、いつかスキーパトロールとして働く山本さんにテストをお願いできるような製品をつくりたいと考えていました。

—— メーカーとユーザーが協働して開発が進んだんですね。

山本 吉田さんにこういう長靴をつくりたいという強い想いがあって、テストが始まりました。自分はそれに対して意見を伝える立場。意見を言ったら

それで終わりという形ではなく、吉田さんは開発担当の方と一緒に、意見を汲み取り、試行錯誤して、出来ることで最大限取り組んでくれました。去年の夏に小樽の工場見学させていただいて、開発の方を紹介していただきお話もできました。何もない白紙のところからできたこの長靴は、本当にみんなの想いと努力の結晶ですね。

吉田 この靴が完成して販売できるのがとても嬉しいです。

—— フィールドブーツ #1308の開発はいつ頃から始まっていたんですか？

吉田 フェルト素材を取り寄せて、プロトタイプをつくり始めたのは、2019年の夏頃でした。本当はフェルトの裏生地を使いたかったのですが、第一ゴムにはフェルトの裏生地を縫い付けて長靴を作り上げる技術がなく、インナータイプとして使うことになりました。

当時、10mmの厚さのフェルトの縫製が上手くいかず、フェルト生地を靴に入れるようなインナータイプに仕立てる工程は外注し、その縫製は2019

年の10月くらいからスタートしていたんです。

—— 長靴に欲しい要素を伝えることができましたか？

山本 必要だと思う機能をお伝えして、第一ゴムの方々が受け止めて、色々考えてくださって、そして最大限できることで仕上げてくださった。カバーに関しても、最終段階まで調整し、これまで以上に大胆に長くし、形を維持しながらうまくベルトで絞れるように変更し、雪が入ることを防ぐ、フィット感の向上につなげて下さいました。

まずは第一ゴムの長靴が、冬山で役に立つのかという検証から

—— どのようなやり取りで進んだんですか？

吉田 冬山という厳しい条件下で第一

ゴムの製品を履いていただき、フィールドバックを得る機会は今までありませんでした。だからまずは第一ゴムの長靴が、冬山で役に立つのかという検証からスタートしました。ゴムの柔らかさや、靴底の滑りにくさは、初期段階から高い評価をいただきました。初期の試作品から大きく変わっているのは、本体の外側につけているカバーの形状や長さ、それから縫い方です。

—— 最初に改善したのはどこですか？

山本 まず最初はつま先の形状から変えてもらいました。

吉田 最初の試作品のつま先は、現在と同じように4本線が入っていたんです。他社とデザインが似ていると感じたのと、夏のフィールドブーツと対になる冬靴を考えていたということもあり、次の試作品では、つま先の4本線を取り除き、フィールドブーツ #1000のようにつま先をガードする形にしたり、作業の工数を考慮して

薄いゴム生地を2枚貼っていたものを、厚い生地1枚に変更しました。

—— 全体的にスマートにしたんですね。山本 そうですね。シンプルに。

吉田 しかし、最初のモデルから改善したモデルに関して、「つま先に力を込める感覚とフィット感が全然違う、最初のモデルの良さが完全に失われている」と言われました。そこですぐに修正したんです。他社と同じ形にはしなくなかったのですが、明確な理由があるなら、同じ見た目であってもそれには意味があるって思えたんです。だから正しく言えば「戻した」ということですね。貼る枚数を減らして工程数を少なくしたいという考えもあったのですが、それは良い方向には働きませんでした。

山本 「これで試して欲しい」と最初の長靴を履いた時のフィット感がすごく良かったんです。足を入れた時の心地良さ……。なんでもそうですよ





ね。靴や服がピタッときた時に「これだ!!」となっちゃいますよね。その感覚。改善点はあるけど第一印象はすごく良かった。で、2作目を試しに履いてみたら、あれ？フィット感ないなこれ、絶対に前の方がいいよって。

吉田 ハッキリ言っていましたね。

山本 ハッキリ言いましたよね。これならただの暖かい長靴だって（笑）。

—— やりとりはスムーズに進みましたか？

吉田 山本さんには、何か問題が見つかった時にはすぐに連絡をくださいとお伝えしていました。最初の年には連絡がなかったのですが、2年目の年明けに連絡がきたんです。「今シーズンは雪が多くてちょっと悪いところが見つかって……」って言われた時には「ついに来た……」って思いました。

「20cmぐらい積もると、跳ね上げた雪が入ってきちゃう」って。これはすぐ解決しないと販売できないなと思い、そこから、なんとか雪の入らない形を目指しました。カバーの絞りを変えたり、カバーの形自体を変えたり。複数の改善案を並行して進めて、なんとか形にできました。

—— かなり高機能な長靴ですが、冬山で働く方のために開発した製品ですか？

山本 冬山だけでなく、第一ゴムの工場がある小樽の街もイメージしていました。限られた場所だけの長靴をイメージしても意味がないと思って。雪降る時期、色んな場所で履けるオールラウンドな長靴を目指しました。幅広い方に対応できる長靴は第一ゴムさんだから作れるんじゃないかな。暖かいけどゴツゴツしているブーツもありま

す。でもこれは、いろいろな方が履けるスマートなものになっていると思っています。

—— 女性でも履けますか？

山本 履けると思います。ぜひ履いてみて欲しいですね。フィット感があるのですごく軽く感じるんです。

※あくまで個人の感想であり、耐久年数は使用条件や履き方で変わります。着用における感覚は、個人差があります。商品についてのお問い合わせは第一ゴム(株)まで。



小樽でつくる長靴への誇り

1935年、北海道・小樽に創業。

第一ゴムは、小樽にある自社工場で長靴をつくり続けています。

ゴムを伸ばし、型を抜き、貼り合わせて、窯で焼く。

一足ずつ手作業でつくる長靴の製法は、

80年以上前から変わりません。

第一ゴムの長靴は、厳しい北海道の冬道でも滑りづらく、長持ち。

工場では、今日も長靴がつくられています。

DAICHI



ゴムってなに？

一般的にゴムと呼ばれている材質は、大きく分けて天然ゴムと合成ゴムの2種類です。天然ゴムは、ゴムの木から採れる樹液（ラテックス）を乾燥させて得られる天然素材。古くから南米の原住民が活用していて、アメリカ大陸を発見したクリストファー・コロンブスがヨーロッパに紹介しました。一方の合成ゴムは、原油を分解して化学的につくられます。自動車産業の発展や戦争によって研究開発が進みました。2017年のゴムの生産量はおよそ2840万トン。天然ゴムと合成ゴムの割合はほぼ同じ。合成ゴムが少し上回っています。



ゴムの木から、ゴムの元となる樹液を採集している様子

動きやすく、長持ちする長靴

第一ゴムの長靴は、天然ゴムの量にこだわりがあります。ほどよい硬さを出し、型崩れを防ぐために少しだけ合成ゴムを加えていますが、ほとんどは天然ゴム。履き続けるとその差は歴然。天然ゴムの比率が高い第一ゴムの長靴は、動きやすく、割れにくいんです。やわらかいゴムは、地面にしっかり食いつき雪や氷の上で滑るのを防ぎます。そして第一ゴムでは品質を確かなものにするために、1足ずつ水圧検査をしています。長靴を空気で膨らませた状態で水につけ、空気漏れがないか手作業で検査してから出荷。水が浸みってくる心配はありません。長靴は1年で履きつぶすものだとお考えのあなた、ぜひ一度第一ゴムの長靴を試してみてください。



第一ゴム株式会社

北海道小樽市奥沢3丁目29番地32号

tel : 0134-22-5161

fax : 0134-23-4340

info@daiichi-gomu.co.jp

daiichi-gomu.co.jp